

ビツァーは勝者か

『ハードタイムズ』における結末の謎

奥田真由子

ディケンズ (Dickens) の『ハードタイムズ』(*Hard Times*, 1854) は概して、「事実」に対する「空想」の重要性を簡潔に描写した作品と解釈されてきた。また「空想」「事実」というキーワードを使って複数の社会問題を扱ったために、全体的に散漫な印象を与えてしまい、初期のころから賛否両論の評価を受けてきた。例を挙げると、ギッシング (Gissing) は本作品を「政治経済学の問題と様式について、どうしようもない誤解を表している」(22)と批判し、ウィルソン (Wilson) は、『ハードタイムズ』はディケンズの当時の社会に対する態度の延長と強化の点で重要ではあるが、傑作のひとつとは言い難い、と断定する(235-37)。それらに反してチェスタートン (Chesteron) は、いくつか問題もあるものの最高峰のひとつだ (169-77) と述べ、リービス (Leavis) は本作品を「道徳的寓話」(47)と規定し、傑作のひとつと例示している。

しかし本当に『ハードタイムズ』は、単純な解釈で社会批判をしている小説なのであるか。もし「空想」対「事実」という構図を通して、功利主義もしくは事実偏重主義を非難するために本作品が描かれているのならば、結末における登場人物たちの姿に最もその意図が見られるだろう。例えば、教育システムの犠牲者といえるトム (Tom) は、国外逃亡中に熱病で死亡し、ルイーザ (Louisa) は再婚することなく、想像力を重視した人生を送り直す姿が描かれる。そして彼らとは対照的に、空想を体現するサーカス団の子供シシー (Sissy) は、自身の子供たちに囲まれ幸せにくらすと締めくくられる。

以上から、事実のみで生きてきた者は後にその代償を払わされ、想像力を保持したものは穏やかな人生が送れると、本作品は示唆していると思われる。しかしここで見落としてはいけない点が二つある。一つ目は、シシーの結末である。スミス (Smith) は、登場人物の未来は幸福なものではないが、シシーだけは完全に幸福な未来が待っていると指摘する(118)。しかし彼は、常に他者を思いやるシシーの最大の希望がかなわなかったこと、つまり失踪した父親と再会できなかったことを考慮にいれてはいない。二つ目は、銀行の使い走りビツァー (Bitzer) の存在である。彼は事実偏重主義教育の優等生であり、様々な

事象をデータとして把握し、一切の無駄を廃して、自己の利益のみを追求する人物である。このように、事実偏重教育の権化であるピッツァーは、明らかに非難的となるべき人物であろう。しかし実際には、彼はなんら疑問を持たず、うまく人生を渡っていく。というのも結末でピッツァーは、銀行でのトムに地位に望みどおり就くことができ、雇い主バウンダビー (Bounderby) に褒め称えられているのだ。確かにピッツァーが、人間らしい感情や娯楽を知らずに生涯を過ごすことは、それ自体が彼への罰になっていると取れなくもない。しかし、他の主要人物たちが何らかの変化を余儀なくされていること、そしてもしウィルソンが指摘するように、シシーとピッツァーが登場する冒頭の授業風景において、「グラッドグランド (Gradgrind) の事実重視の生気のない世界とサーカス団の想像力の世界とのコントラスト」という明瞭な舞台設定がなされ、「これほど単純なプロットが、想定されている寓話の説明に利用されている」(238) のならば、ピッツァーの思い通りの結末にはやはり疑問が残る。そこで本論文では、連載当時の社会問題を考察した上で、ディケンズがどのような意図を持ってピッツァーを創造し、上記のような結末にしたのか検討していく。

18世紀60-70年代から19世紀30-40年代にかけ、イギリスは産業革命の時代を迎える。産業革命とは、綿工業部門の機械化による関連産業の大工業化に基づき、資本-賃労働関係が社会的に成立した事態を指す(長島 92)。言い換えると、18世紀後半に3つの紡績機と織機が発明され、蒸気機関と結びついて工業制度が成立する。機械による生産で製品の価格が下がり、その分市場が広がる。その結果、交通手段の改良、最終的に鉄道開設に行き着く。こうして新たな工業力が少数の裕福な資本家に独占される一方、大量の労働者が生み出された(長島 98-100)。

『荒涼館』(*Bleak House*, 1852-3)の鉄工場主ラウンスウェル (Rouncewell) が銀行家であるのと同じく、バウンダビーは銀行家、商人、製造業者などを兼ねた、地方の資本家階級である。彼の紡績工場では蒸気エンジンのピストンが単調に上下に動き、労働者たちの生活もまた憂鬱単調で、「これらの特性と引き換えに、生活の快適さが世界中にひろがる」(29)と描写される。さらに、登場人物たちがしばしば客車に乗ってコークタウン (Coketown) を出入りするように、鉄道はコークタウンを外の世界と結ぶ主要な交通手段

として機能する。以上の設定から、本作品の舞台となる架空の工業都市コークタウンは、まさに産業革命がもたらした典型的な地方工業都市なのである。

さてここで、当時の鉄道とそれを取り巻く諸事情について、さらに注目してみなくてはならない。イギリスでは 1820 年代より鉄道建設が始まった。本格的に設立された鉄道会社は、1830 年開通のリヴァプール マンチェスター間の鉄道である。その後の急速な鉄道建設ブームにより、1852 年までに鉄道はイギリス中を網の目のように張り巡らされた。それに伴い、1843 から 44 年には熱狂的な鉄道投資ブーム、「鉄道マニア」が訪れる。鉄道株は国債よりかたいという認識は、あらゆる職種、階層の人たちを、鉄道株への投機に駆りたてることになったのである。しかし 1845 年から 47 年の間に、幾つもの主要鉄道会社の株式が暴落を示し、投機による破産者もまた後を断つことがなかった¹⁾。

このような鉄道と投機破産にまつわる挿話は、『ハードタイムズ』においても見られる。バウンダビーの地所と別荘は、元々ある大事業家のものであった。しかし彼は「通常よりもより近道をして莫大な財産を築こうと決意し、20 万ポンドほど過度の投機をして」(223)、破産してしまった。そこでこれらの地所と別荘が、抵当流れになってバウンダビーの銀行のものになったというのである。

さらに、バウンダビーがその別荘の近くまで鉄道で近づけるようにした (222) ことにより、鉄道はより意義深いものとなっている。なぜならコークタウンとバウンダビーの別荘を繋ぐ鉄道の道程には、ある重要なものが存在するからだ。それは「廃坑となった炭坑」が点在する「荒地」(222) である。そしてその炭坑は後に「過去と現在の炭坑」(261) と表現され、最終的には、銀行強盗の汚名を着せられたブラックプール (Blackpool) を死に至らしめる役割を果たす。

1844 年以降、新線建設ブームにより、鉄道はまさに網の目状態で国土を覆っていった。バウンダビーが自分の別荘の近くまで鉄道を伸ばしたというのも、おそらく彼が地元の実業家であり、鉄道の有力な株主であったからだと推測できる。しかし急速な鉄道網の発達には、石炭の需要を過剰に増やし、使い古された廃坑は無数に放置されたままであった。またブラックプールが死に際に述べる言葉通り、炭坑の底にたまっている危険なガスによって死亡事故が多発したにも関わらず、その事実はいやむやみに処理されてきた (362)。「過去と現在の炭坑」とは、ブラックプールが落ちた「古い地獄坑」(356) のように、鉄道ブームの陰で過去も現在も人々を飲み込む廃坑の実情を示唆している。そしてまた、鉄道が無数の死の炭坑を越えて、投機破産の抵当と工業都市を結び、抵当を手にした人間が地方銀

行家兼工場主だというのは、まさしく当時の鉄道を取り巻く社会の縮図なのである。

さらに本作品には、1840年代から50年代にかけて頻繁に起こった、鉄道事故に関する記述がある。当時、鉄道会社や政府が事故を防ぐ対策を怠っているとして、鉄道事故は社会問題になっていた。しかし議会において鉄道株主や利益代表が大きな票決力を持っているため、結局これといった対策は取られずじまいであった。ここでは下院議員たちが事故の原因を究明し鉄道会社の非を論じるどころか、鉄道の全機能をすばらしいものと盲信して、被害者を揶揄する様子が皮肉な口調で描かれている(164-65)。このようにディケンズは、随所に広がる投機破産や議会の怠慢による弊害を省みない世相への危機感を、鉄道が結ぶコークタウンとその周辺描写に潜ませている。コークタウンとは架空の都市でありながら、その実当時の社会問題を内包した一都市なのである。

では当時の社会を体現するコークタウンで「出世は確実」(153)と謳われるピッツァーは、事実偏重主義教育により、どのような人物に成長したのか。使い走りとなったピッツァーの現在の家庭環境は、次のように説明される。まず彼は父親が亡くなると、母親の町への居住権を主張し、彼女を救貧院に閉じ込めた。ピッツァーは母親に年に半ポンドのお茶を贈っているが、彼曰く、それは彼自身の弱さの表れだという。なぜなら贈り物とは受け取り側をさらに貧窮化させるものであり、彼にとってお茶とは「できるだけ安く買い、できるだけ高く売る」のが「唯一理にかなった処理」(153)となる品物だからだ。前者の贈り物に対する考え方が、1834年の新救貧法によるものなら、後者は資本主義社会の金銭的売買の姿勢を簡潔に表したものである。さらにピッツァーは、自らの境遇について「ぼくは一番安い市場価格で作られ、一番高い価格で自分自身を処理しなくてはならない」(384)と思考する。そのため彼は「ぼくはトムさんの地位につきたい。ぼくにとってそれは出世であり、出世はいいことだから」(383)と述べるのである。このようにピッツァーは、常に自分自身をもお茶と同じく商品と考へて、出世願望を掲げる。この考え方はセルフヘルプを美德とする当時の風潮を物語っており、その代表的人物に「鉄道王」とよばれたジョージ・ハドソン (George Hudson) が挙げられる。

ジョージ・ハドソンとはもともと服地屋の徒弟で、鉄道経営に投機することで莫大な財を成した人物である。彼は小さな鉄道会社の株を多数握り、取締役会長となり、1844年に

はそれらを大会社にまとめる。その鉄道会社の勢力範囲は驚異的に伸び、彼は地元ヨーク市長や保守党の議員になるに至る。彼はそのセルフヘルプによる成功のため、一躍時代の寵児ともてはやされた。しかし 1849 年、ハドソンの数々の不正事実が明るみになり、鉄道株式市場は大混乱となる。ハドソンは詐欺師とよばれて消えていった。後に残ったのは紙くず同然の株券であり、そのしわよせは投機にはまった庶民たちいき、破産者が続出した (小池 52-58)。

エンゲル (Engel) が指摘するように、基本的にディケンズはセルフヘルプの価値を信じている (962)。なぜなら彼自身、セルフヘルプにより成功を収めた人物だからだ。しかしディケンズは、『ハードタイムズ』の翌年から書かれた『リトルドリット』 (*Little Dorrit*, 1855-7) の序文で、マードル (Merdle) の構想を一部、鉄道投資時代からとっていると言及している (xxi)。マードルとは絶大な力を持つ金融業者、銀行家だが、放漫な経営により破産し自殺する。彼は詐欺師であり、彼の事業に投資した人々は、次々と破産するのである。このようなマードル氏のモデルの一人にジョージ・ハドソンが一般的に認められていることから、ディケンズは世間が熱狂するセルフヘルプ信奉の裏にある、資本主義の思わぬ落とし穴に警告を発していると言えるだろう。

しかし他の登場人物が賭け事をする事について、ピッツァーは「賭ける側には勝ち目がない」(163)という所見を述べる。さらに彼は、「給料を少しずつ蓄えている」(155)と言う。この言葉によりピッツァーは、投機の危険性を理解し、地道なセルフヘルプを重んじる勤労者のように思われる。しかし彼は、なぜ工場の労働者は貯金せずに組合運動で生活の改善を訴えるのか、貯金なんて一人の人間ができたのだから、他の人間にもできるはずだ、と意見する (155)。そしてこの言葉の直後に、語り手が「6ペンスを元手に6万ポンドを作り出したこの町の資本家は、いつも6万人近くの労働者たちがそれぞれ6ペンスを元手にどうして6万ポンドをつくらぬのか、不可解だと公言し、このちょっとした偉業を誰も成し遂げないことを、多かれ少なかれ非難する」(156)と続けるのである。つまり、ピッツァーの思考は元来労働者ではなく資本家のものであり、そのためピッツァーは銀行の使い走りをして、後に銀行でのトムの地位につく上に、バウンダビーの死後は銀行を継いでいる可能性さえあると推測できるのだ。

では資本家ピッツァーの賭け事への否定的な見解は、どのようなことを示唆しているのか。先述した「6ペンスを元手に6万ポンドを作り出した資本家」とは、おそらくジョージ・ハドソンのように投機することで、事業を拡大していった実業家のことと考えられる。

それでは銀行家のピッツァーはどのように資本を増大させるのか。それは株券購入などを求める人々に、貸付や証券の引き受けなどをするというものである。ディケンズは自身の経営・編集による週刊誌『ハウスホールド・ワーズ』(*Household Words*) 上で、ロンドンの金融の中心地シティー (the City) のあちこちで見られる、投機破産のために幽霊のようになった人たちの群れを描いた“City Speculators”や、新しいコルク抜きの特許を巡るビジネスブームとその損失の過程を語った“Provisionally Registered”、「物質的富の崇拜」という意味の題をつけた、証券取引という偶像崇拜に熱狂する人々の姿をとらえた“The Golden Calf”などを載せている (Engel 966)。そしてそれらの一時の夢をみた債務者から、ピッツァーたち債権者が資本を吸い上げていくのだ。ピッツァーは最初の登場場面で、「もし彼は切られたなら、白い血を流すだろう (he would bleed white)」(5)と表現される。これは彼の色素のなさを表したものである。しかしこの“bleed white”には「最後の一銭までしぼりとる」という意味もあり、銀行家ピッツァーの別の側面を窺わせる。そしてトムのような人間が、投機などの賭けによる借金を重ねれば重ねるほど、ピッツァーは堅実に6ペンスを元手に6万ポンドを作り出し、トムを追い詰める側へと回っていくのである。

ピッツァーがトムを捕まえにきた場面において、グラッドグラインドは昇進に匹敵する額のお金を交換条件に、ピッツァーにトムを見逃してもらおうと試みる。しかしピッツァーはその申し出を拒む。なぜなら彼は前もってどちらが得か計算し、銀行での将来の昇進のほうが利益があると判断したからである。またピッツァーは、グラッドグラインドの学校教育は、授業料を払っての契約だったのだから、契約が終われば恩義もなにもないと断言する (383-84)。これらの考え方はグラッドグラインドの学校の、功利主義的な政治経済学の教えをそのまま引き継いだものである。そして当時の政治経済学で支配的だったのは、富の配分は自然の普遍の法則によって支配されており、個々人の自己の利益の追求が全体の福利につながる。したがって国家は自由放任主義を採り、干渉するべきでない、という考え方である²。ピッツァーは「個々人の自己の利益の追求」こそが、社会で何よりも優先されると解釈し、自己の幸福のみを追求して「出世盛り」(396)と称賛される。このようなピッツァーとは、個々人の利益を追求するために弊害を省みずに、鉄道建設、投機ブーム、セルフヘルプ信奉にうかれる世相と、それを利用し私腹を肥やす資本家、そして「国民と呼ばれる抽象的なものに対して」の「義務」(396)を自由放任と称して放棄した、議員たちの姿全てを反映した人物なのである。

以上のようにピッツァーは、世間と同じく小手先の論理を振りまく人物として造形されている。しかし彼はトムを取り逃がしてしまうにも関わらず、出世という当初の目的を果たす。つまり実際的な富を盲信するピッツァーが、利益という名の「幸福」を手に入れ、本作品は締めくくられるのである。先述したように、もしもディケンズが世間の風潮を非難したいのならば、このピッツァーの結末は不適切なのではないだろうか。そこで次に、しばしば強調されるシシーとの対照関係を通して、ピッツァーの結末の謎について検討する。

まずコークタウンにはびこる事実の押し売りを象徴するように、子供たちに一切の空想や想像力を禁じ、事実だけを要求する授業風景が描写される。最初にシシーが「馬の定義」(4)を聞かれるが、彼女は答えられない。そこで代わりにピッツァーが「四足獣。草食性。四十本の歯」(7)など、本で覚えた馬の定義を完璧にこなす。ピッツァーの優秀さとは対照的に、サーカスの曲馬師の娘であるシシーが「いちばんありふれた動物のひとつの事実も知らない」(5)と宣言されてしまうのだ。さらにその場面では、教室に日光が射す最初の端にシシーが、最後の端にピッツァーが座り、シシーの濃い髪や目の色と、ピッツァーの薄い髪や目の色が極端に対比される。

ではその後の彼らの関係は、どのように描かれているのだろうか。馬の定義の授業後、グランドグラインドとバウンダビーは、疾走するシシーに出くわす。彼女は追いかけていたので「逃げたかった (I wanted to get away)」(32)と述べる。追いかけている主はピッツァーであり、彼は「曲馬のりは自分たちが何を言おうが気にしない。・・・やっぱりおまえは曲馬乗りだ (An't you [Sissy] a horse-rider!)」(33)と、シシーを嘘つき呼ばわりする。さらに彼は、馬の定義を教えてやろうとしたただけだ、と弁解する (33)。

次は作品終盤、グランドグラインド、ルイーザ、シシーの3人が、トムを海外逃亡させようとした時のことである。突然、追いかけてきたピッツァーがみなの前に立ちはだかり、「彼は曲馬のりたちに逃がされてはいけない (he [Tom] mustn't be got away by horse-riders)」(381)と叫ぶ。

幼少のピッツァーがシシーを“horse-rider”と呼んだことから、トム逃亡場面でのピッツァーの言葉は「トムはシシーたちに逃がされてはいけない」と置き換えられる。さらに、グランドグラインドに引き取られた直後のシシーは、以下のように描写にされる。

Sissy Jupe [. . .] was not without strong impulses [. . .] to run away. It hailed facts all day long so very hard [. . .] that assuredly she would have run away, but for only one restraint. (72)

このようにシシーは「事実」とされるものからの逃避を願っている。そしてこの描写に、先述した彼女の“I wanted to get away”という言葉と併せると、ピッツァーはシシーにとって逃げたい「事実」の象徴と捉えられる。しかしピッツァーがシシーを2度も攻撃の対象にするのに対し、シシーは自力で彼から逃れることができない。つまりシシーは事実を象徴するものがピッツァーになると、想像力や感情という力を発揮できないのである。

以上のシシーとピッツァーの関係を検討したとき、ディケンズが単純に「事実」と「空想」を対立させて、「空想」の力を支持しているとは言えないだろう。ましてや、事実が空想を圧するのと同じように、空想の力は事実を制御するものではないのだ。

作品終盤、子供時代に出会うべき空想やおとぎ話と、それらを知ることによって身につくであろう思い出について、語り手は「それらは、一度は信じるのが大変よく、成長して信じられなくなっても、忘れずにいることが大変良いものだ。・・・いかにして『空想』のやさしい光を通して『理性』に初めて出会い、同じくらい偉大な神々を敬いながら、それを慈悲深い神と見るようになったかという思い出。『理性』は・・・冷酷で無慈悲な『偶像』ではなかった」(263)と言明する。またグランドグラインドが、事実だけが人生で大事なものだと言った第1部第1章の題が「必要な唯一つのもの (the One Thing Needful)」であるのに対し、グランドグラインドが「心の知恵」(297)を認めた第3部第1章の題が「もう一つの必要なもの (Another Thing Needful)」に変化していることに注目する。「もう一つ」とは即ち、どちらか一方だけが必要なのではないということである。ではこのことを念頭に置いて、ピッツァーと対照されるシシーの本質について考えてみたい。

ハーディ(Hardy)はシシーが「活動的ではなく、ただ象徴的に卓越した人物」であるために、彼女の「ハッピーエンディングは傷ついていない」(48)のだと表現する。またコールス(Coles)は、シシーは常に「事実に対立する空想の非体制主義」を伝える人物であり、それを潰そうとする効力に屈しない、と述べる(170)。これらの意見は、シシーを事実偏重主義と対極にある「空想」の重要性を体現した人物と見て、その空想性のために彼女は現実のダメージを受けないという見解を示している。しかし本当にシシーは「空想」

を信じて、最後に幸福を手にした人物と言い切れるのだろうか。

ヒグビー (Higbie) はシシーがサーカス団に戻らないことを指して、「想像力が描くものへの子供のような信念に、もはや戻ることはできないという、ディケンズの意識が表れている」(127) と言及する。また彼は、ディケンズは想像力の限界を感じている、とも指摘する (123)。確かにサーカス団はトムを逃がすことには成功するが、だからといってピッツァーを罰したり、ましてや学校の方針を変えたりは出来ない。しかしサーカス、そしてシシーを「空想」の代表にすること自体に疑問が起こる。なぜならサーカス団の曲馬師であったシシーの父親は、客にやじられるようになり、将来を悲観して出て行ってしまふ。また作品中、サーカス団員の過酷な日々の練習について触れた記述がある。さらに、入場料をとるサーカス団員は「偽金を見分けるために極めて油断なく目を光らせていて、目下お金以外のものは目に入らなかった」(372) と描写されている。人々に娯楽を与えるサーカスでさえ、資本主義の歯車の一つであり、娯楽産業のビジネスの一つという現実があるのだ。そしてシシーもまた、サーカスの現状を知っており、父親の失踪という問題を抱えている。しかしサーカスやシシーが他の登場人物たちと異なる点は、先ほどの「空想」と「理性」の調和を持っているということである。彼らはそれらのバランスをとることで、自分たちの領域を侵され、精神的に破産することがないのだ。

しかしピッツァーはシシーを目の敵にし、論理的な弁論で打ち負かしてしまう。なぜならピッツァーこそ当時の社会の主流であり、国の政策さえピッツァーのような人間が動かしているからである。ディケンズは『ハウスホールド・ワーズ』上で「外交や軍事政策は、外国ローンの手形譲渡人の手の内にある、子供のおもちゃ、単なる空気の泡だ」(“Bulls and Bears” 517) と非難している。イギリスという国全体が、シシーのような調和を排斥し、金銭に関する実権を握ったものが、ピッツァーのように着実に上り詰めていくのだ。しかし作品の最後は、想像力がなくては「最も頑強な肉体を持った大人でさえ精神的には完全に死んでしまうだろう。また数字が示しうる極めて明白な国家の繁栄でさえ『壁に書き記された文字』となってしまうだろう」(398) と締めくくられる。「壁に書き記された文字」とは破滅の予言を意味する。ピッツァーは、本作品中では計画通りの出世を果たして終わる。そしてこの作品が書かれた 1854 年当時、まるで、過酷な労働を強いる工場を「妖精の宮殿のように」(84) 錯覚した急行列車の乗客のように、人々は国家が繁栄を極めていると思い込み、投機に一喜一憂し、泡のような富を信じている。しかしいつか破滅の予言は国全体に訪れ、そのころには精神的に死んだ人間が溢れかえっているのだ。ディケンズ

は、ピッツァーという青白い幽霊のような人間が、無情な時代をうまく渡り歩く姿をあえて描き、その姿に暗澹たる将来をみる。なぜなら本作品はディケンズが語る「壁に書き記された文字」であり、量産されたピッツァーたちが国家を破滅に導く道程を示唆するものだからである。

註

- 1 チェンバース 57-62 と入江 37-39 と長島 117-20 および小池 45-58 を参照。
- 2 グラッドグラインドが体現するヴィクトリア朝功利主義と、アダム・スミス (Adam Smith) が提唱した政治経済学については、Simpson 33-5, 77 を参照。また当時のレッセ・フェール (自由放任主義) の風潮については、Simpson 126-27 を参照。功利主義を一つに定義することは出来ないが、本作品では「個人のための利益の追求」という思想に批判的である。

引用文献

- チェンバース, J. D. 『世界の工場 - イギリス経済史 1820-1880 - 』宮崎犀一, 米川伸一訳, 東京, 岩波書店, 1996.
- Chesterton, G. K. *Appreciation and Criticism of the Works of Charles Dickens*. 1911; New York: Kennikat Press, 1966.
- Coles, Nicholas. "The Politics of Hard Times: Dickens the Novelist versus Dickens the Reformer." *Dickens Studies Annual* 15 (1986): 145-79.
- Dickens, Charles. "Bulls and Bears." *Household Words* 28 Jan. 1854: 517-23.
- . *Hard Times*. Oxford: Oxford UP, 1998.
- . *Little Dorrit*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Engel, Monroe. "The Politics of Dickens' Novels." *PMLA* 71.4 (1956): 945-74.
- Gissing, George. *Charles Dickens*. 1924; New York: Kennikat Press, 1966.
- Hardy, Barbara. "The Complexity of Dickens." *Dickens 1970*. London: Chapman and Hall, 1970.
- Higbie, Robert. *Dickens and Imagination*. Gainesville: Florida UP, 1998.
- 入江節次郎 『独占資本イギリスへの道: 現代への序曲』京都, ミネルヴァ書房, 1962.

小池滋 『英国鉄道物語』東京，晶文社，1980.

Leavis, F. R. *The Great Tradition*. 1948; London: Chatto and Windus, 1955.

長島伸一 『世紀末までの大英帝国：近代イギリス社会生活史素描』東京，法政大学出版局，1988.

Simpson, Margaret. *The Companion to Hard Times*. Mountfield: Helm Information, 1997.

Smith, Frank Edmond. “Perverted Balance: Expressive form in *Hard Times*.” *Dickens Studies Annual* 6 (1977): 102-18.

Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Martin Secker and Warburg, 1970.

『中部英文学』第 24 号，日本英文学会中部支部，pp.1-13，2005 年 3 月 31 日 .